

(二) 次の文章を読んで、後の問いに答えよ

串田和美さんと出会ったのは、私が中学生の頃、仕事を始める前のことだ。

父のお弟子さんだった人が、串田さんが当時(A) シユサイしていたオンシアター自由劇場の芝居に出るといっているので観に行った。(1) 観た『もつと泣いてよ、フラッパー』に感動して、自由劇場の芝居を観に行くようになった。

俳優達による演奏、色鮮やかな(B) シヨウメイや衣裳、夢の中から飛び出してきたような(C) トウジョウ人物達……。すべてが(D) シゲキ的で感動的だった。

それ以来、劇場に行く度に、劇団員でもないのに打ち上げの席にいさせてもらったり、皆が食事に行くときに付いて行ったりしていた。

串田さんには、私が(2) 足を運んだことのない下北沢の劇場に連れて行ってもらった。串田さんには、私が(E) タクサンのものを見せてもらった。

あの笑顔で「芝居やんまよっ！」なんて言われたこともあった。「そうですよねエ」などと答えるのが(F) マくらいドキドキしたが、私が芝居を演りたいと思う気持ちを固めたのはあの頃かもしれない。

串田さんと私には、幻の芝居がある。

私が仕事を始めて二年目くらいの頃、串田さんが「ハムレットを演らないか」という話を持って来た。その構想はなかなか面白く、中学生の頃から串田さんの芝居を観てきて、やっとその舞台に立てる！と嬉しくてたまらなかった。(3) その芝居は、自由劇場の解散の時期と重なり、幻となった。

その後、串田さんは、ロンドンへ(a) 放浪の旅に出た。幻となったことが悲しかったかどんな気持ちだったか……。そのときの自分を、私自身覚えていない。

覚えているのは、手紙を書いたことである。ロンドンの串田さんへ、こんな言葉を届けた。

「一緒にお仕事が出来なかったことは残念ですが、またいつかそんな時がくるかもしれない。でも、結局一緒にお仕事をしないまま、ということもあり得る。たとえそうだととしても、お互いの芝居を見続けていたりして、そういう関係もありますね……」

確かこんなことを書いた。そのとき十八歳くらいだった私の、(b) 精一杯の「ポジティブ・シンキング」だったかもしれない。

そんな私に、串田さんは一通の手紙を送ってくれた。

「知り合いではあるけれど、一度も一緒に仕事をすることがない。そんな関係もある。しかし、同じ芝居を志す者同士として、一緒に芝居が出来ないというのは淋しいことだね……」

どんな人とも同じ目線で接する、串田さんらしい言葉だった。その言葉に励まされて、私は、(いつか……)という想いを持ち続けた。

(4) 約四年後、私は再び串田さんと出会った。

広尾の、とある喫茶店で、串田さんは一冊の本を私に渡した。『プレヒト戯曲集』、これが『セツアンの善人』との出会いである。

オーブンカフェで、串田さんからあらすじを聞いて、即、やりたい！と思った。この想いは、戯曲を読んでみて確実なものになる。

私は四年の間、串田さんと一緒に仕事をするために何かをしていたわけでも、また仕事が出来たらどんな作品でもいい、と思っていたわけでもない。しかし、再び串田さんと会い、作品を手渡されたとき、（一緒に仕事をするならこれかな）と直感した。この勘が正しければ、二年後に再演を迎えられた、ということに少し自信が持てる。

何年かして串田さんと、（あんなことがあったね）と話すことがあるだろうか。思い出がよみがえる度、一緒に芝居が出来なくても精一杯な気持ちで（私は平気よ）と思っていた私と、そんな十代の女の子に優しい言葉を投げかけてくれた串田さんの、心のやりとりを懐かしく思うんだろう。

想いを持ち続けることが、希望を、夢を、つないでいくことになる。人は、そう出来る力を持っているはずだ。

（松たかこ「心のやりとり」）

問一 傍線部（A）～（E）のカタカナの部分に漢字に直せ。

問二 傍線部（a）「放浪」の読みとその意味を述べよ。

問三 本文中の[F]の語句として、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア・穏やかな イ・精一杯な ウ・軽やかな エ・爽やかな

問四 傍線部（b）「精一杯の“ポジティブ・シンキング”」とあるが、どのような気持ちであるのか、本文のことばを用いて三〇字以内で記述せよ。

問五 ①～④に入る語として、最も適当なものを次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えよ。ただし、一つの記号は複数回数選べないものとする。

ア・そして イ・そのとき ウ・それまで エ・しかし

（二） 次の文章を読んで後の問いに答えよ。

その日の演目はウェーバーの序曲とシューベルトの弦楽四重奏、二十分の休憩をはさんでメンデルスゾーンの交響曲という内容だった。

オーケストラを聴くのは何年ぶりだろうと、飯村圭二は休憩時間のロビーでワインを飲みながら考えた。

土曜日の午後たまたま通りすがったホールの玄関に「小谷直樹凱旋記念コンサート」の看板を見つけ、矢も（a）もたまたまらずにチケットを買った。タクトを振る小谷は表情も愕

くほど変わっていた。十年の歳月というより、十年の経験のせいだろう。

(1) 自分はたいして変わっていないな、と圭二は壁巻きの鏡を見ながら思った。休憩時間にワインを飲むという(A) シュウカンは、クラシック・コンサートのお(b) まり、ロビーに出たとたん圭二もべつだん飲みたくもないグラスを手に取っていた。

それにしても、世の中は豊かになったものだ。数年前の好景気に(B) ビンジョウして、立派なコンサート・ホールが次々と(C) ラクセイした。当然それらを(D) ウめるだけのスケジュールがあり、客もいることになる。文化というやつはけっこう金で買えるのだな、と思う。

ワイングラスを片手に(E) カンダンする周囲の声が一瞬静まったと思う間に、圭二は背中を叩かれた。

「やあ。チケットを送ろうと思ったんだが、住所がわからなくて」

コンサートの主役である小谷直樹が燕尾服のまま立っていて、圭二は再会を喜ぶより先に(F) たじろいだ。

「あとで楽屋を訪ねるつもりだったんだが——俺のこと、よくわかったな」

「左の机敷にいたじゃないか。ステージに入ったとたんにわかったさ」

と、小谷は長髪をかき上げて、あたりを憚るように囁いた。

「あの席、音が悪いだろう。次はメンデルスゾーンだから、あそこじゃラッパがやかましい。下においてこいよ、席をとっておくから」

「いいよ。俺はおまえの棒振りを見に来たんだ。上の方が良く見える」

小谷に会うつもりはなかった。もちろん楽屋を訪ねる気などない。周囲の視線にさらされて、さてこの場をどう切り抜けたものかと圭二は考えた。

「なあ、飯村。あとで打ち上げをやるから、顔を出してくれよ。関東響のメンバーも、古株は知っているだろう」

「いや、(2) 仕事があるんでね。また日を改めて」

「仕事って、いまどこにいるんだ」

「え？ きーああ、オーケストラじゃない。俺な、リタイアしちゃったんだ」

小谷は訊き返そうとして口をとさした。リタイアという言葉にはあまりにも不穏な響きがある。音楽家は職人だ。

「音楽教室をやってるんだ。子供らにピアノを教えている」

もう少しましな嘘はないものかと、言ってしまったから圭二は悔いた。四十歳という年齢を考えれば、(3) 嘘ではあるが。

「チェロは弾いていないのか」

「そういうわけじゃないが、もうオーケストラはうんざりでね。もともと向いていない。中央フィルをやめたのも、監督と揉めたんだ」

「そりやおまえらしいけど……何だかもつたないね」

ファンらしい婦人が捧げ持ってきたワインを受け取り、小谷は笑顔を繕って握手を返した。

「(4)、結婚は？」

「あいにく、まだチョンガーだ。おまえは？」

「向こうで結婚した。子供も二人いる」

「小学生にバイエルを教えているうちは、まず無理だな——おい、時間だぞ」

小谷はロビーの時計を見上げ、気ぜわしげに名刺を押しつけた。しゃれた字体で「関東交響楽団音楽監督」とあり、裏には英語とドイツ語が並んでいた。

「あいにく名刺を切らしている。近いうちにこつちから連絡するよ」
実は名刺などこの十年、持ったことがなかった。

小谷は行方不明の指揮者を探しにきた進行係に圭二を紹介すると、垢抜けた握手をして去って行った。

シンフォニーは聴かずに、圭二はホールを出た。自分を紹介した小谷の言葉が (G) 妙に
に
応えた。

(彼、芸大の同期なんだ。正面のS席に替えてくれ)

小谷の掌の汗ばんだ感触が、ありありと残っていた。

(浅田次郎「スターダスト・レヴェュー」)

問一 傍線部 (A) 〽 (E) のカタカナの部分に漢字に直せ。

問二 (①) 〽 (④) に入る語句として最も適当なものを次のア～エの中から一つずつ選
び記号でこたえよ。ただし、一つの記号は一度しか選べないものとする。

ア・もつともらしい イ・ところで ウ・そういえば エ・せつかくだが

問三 本文中の (a) (b) に入る漢字を一字で答えよ。

問四、傍線部 (F) 「たじろいだ。」とあるが、どうしてたじろいだのか。本文のことは
を用いて三〇字以内で答えよ。

問五、傍線部 (G) 「妙に応えた」とあるがなぜか。三〇字以内で答えよ。

(一) 次の文章を読んで、後の問いに答えよ

今日もまた新しい一日が始まる。

顔を洗って目を覚まして、服を着替えて、ドアを開けて、安らぎの我が家に(A)カギをかけて……。(1) 日常が、生活している人の数だけ、毎日、繰り返されている。もちろんこの私にも。

「日々」というのは変わり続ける。どんなにパターン化された生活を送っている人達の「日々」も、(B) ビミョウに変化し続けている。しかし、身体はひとつだ。時間と疲れの積み重ねが「経験」というものに姿を変えてその人自身に刻みつけられる。

毎日毎日、何も経験したことのないゼロの状態に生まれ変わるなんて無理だ。ヒトは生まれてからというものの、何かを身に着け続けている。服も言葉も知識もずるさも……。身に着けることを先に覚えて、削ぎ落とすことを、後になって苦しみながら知る。

しかし、ヒトの本質的な部分が変わらないというのは、ヒトが毎日生まれ変わる、変化に富んだ生き物ではない、ということなんじゃないだろうか。

変わらないヒトが、変わり続ける毎日に挑んでいくのは、ちよつとした闘いかもしれない。辛いことやしんどいこと、身体の疲れを(C) ヨクジツに引きずることも珍しくない。

そんな自分のまま、何が待ち受けているかさえ知らない明日に出かけていくのは、とても(D) ユウカンに思える。

そんな毎日が辛いのか、疲れている人達が多いのか、「癒し」という言葉が流行る。でも私は、何でもかんでも「癒し系」と名付ける(E) ケイコウがあるような気がして、(2) 疑問だ。もちろん、科学や心理学的に証明されている「癒し系」もあるけれど、癒しと刺激の少ない(F) とは限らないのではないだろうか。

それぞれの好みによって、音楽や映像や舞台から、或いは、友人、知人、かけがえのない家族から、刺激を受けることが、その人自身を癒す力になることってないだろうか。

毎日の疲れが積み重なると、ヒトはきつと、知らず知らずのうちに(a) 視野を狭くしていると思う。それを解消するのは、その人自身の人間関係やその人自身が観たり聴いたりするものなんじゃないかなあ。

私はお芝居を仕事としている。私を観る人は様々で、元気な人だけとは限らない。疲れている人、悩みを抱えている人だつてきつといるだろう。自分を観る人が、皆自分のことを好きだなんて、こちらが思い込むわけにはいかない。私だって、皆に好かれようと思いつつながら、仕事をしているのではない。

しかし、私の「何か」を観た人達が、(3) 少しでも刺激を受け、翌日出かけるときに、ほんの少しでも心が軽やかになっていてくれたら、と思う。元気を出して、また一日頑張ろうと思ってくれたら、と願う。

出来れば、心が軽やかな理由が分からないくらいがいいな、と思う。何でだか分からないけど少し元気、少し楽、くらいがいいな。

ヒトは生まれてからというものの、何かを身に着け続けている。家族、泣いたり笑ったり

怒ったりする感情、言葉、知識、成功、失敗、挫折……。日々、学んでいかなければならない。二度とゼロに戻れることはなく、生まれた瞬間から、終わるまでの時間を生きていく。こんなふうによく、ヒトは何で不自由なんだろうと思えてくるが、少し見方を変えれば、その人次第でいかようにも生きられる、生き方は自分次第なのだと思う。

私もまた、自分の人生を楽しみたい。生き抜いてみたい。
今日もまた、私の知らない人達が、私の知らない所で、毎日を生きている。その人達が、ふとしたときに私を観て、少しでも元気になり、(4)癒されて、また新しい一日を送れたら、私は幸せだ。

私は私の好きなことをやり続ける。

何処かで、私の知らない人達がほんの少し幸せになれる、私の仕事は、そんな瞬間を作り出すことなのかもしれない。そうなれるのだったら、何かを残したいとは思わない。やり遂げる実感や実績も要らない。

(b) 誰かの夢のあとに消えていく存在で、充分だ。

(松 たか子「夢のあと」)

問一 傍線部(A)と(E)のカタカナの部分に漢字に直せ。

問二 傍線部(a)「視野」の読みとその意味を述べよ。

問三 本文中の[F]の語句として、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。
ア・穏やかなもの イ・ほとぼりそうなもの ウ・軽やかなもの エ・爽やかなもの

問四 傍線部(b)「誰かの夢のあとに消えていく存在」とあるが、どのような存在か、本文のことばを用いて三〇字以内で記述せよ。

問五 (1)と(4)に入る語として、最も適当なものを次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えよ。ただし、一つの記号は複数回数選べないものとする。

ア・もしかしたら イ・ちよつと ウ・ほんの エ・そんな

(二)、 次の文章を読んで後の問いに答えよ。

要するに三重子は兄のことなんかまともに見てはいないのだろうと思いつつ、それがそっくりそのまま、小学生のころの私の兄への気持ちではないかと気づいて唾然とする。ただし「魂で結ばれている」とは思わなかった。私たちは血で結ばれていると思ひ、そのことを(A)トッケンのように思っていたのだ。この人もいつか私のように、あるいは兄と関わりを持った(B)イクタの女性のように、いつか兄を見限り、疎ましく思ひ、いなくなってくれと願うのだろうか。でもそうしたらこの人は、兄なんか見捨ててどこへだっていくことができる。そのことを私は(C)モウレツにうらやましく思う。

五時近くなると、店の外に行列ができた。 (D)マンブクだった。「もう帰りま

す」と鞆から(E)サイフを取り出すと、「いいのいいの、ここは私が払うから」と、大げさに私を制して三重子が勘定を持った。店の外に出て、ごちそうさまでしたと私は三重子に頭を下げた。

「姉になる人間に、そんな(a)くさいこと言わないの」と、三重子は(F)私を苛立たせる一言をつけ加えたが、私は聞こえなかったふりをした。

路地はようやく橙色に染まるりはじめた。ランニング姿の中年男がよろよろと自転車を漕いでいく。あちこちの店から油のにおいが漂っている。路地を出、通天閣のたもとに出る。観光客らしき一団が、ベンチに置いてある馬鹿でかいピリケンさんと写真を振っている。通天閣入り口の向かい側にタクシーが数台停まっているので、そちらに向かつて歩きだしたとき、隣にいた三重子が「ユミちゃん」と叫んで走り出した。(1)なんのことがわからず、遠ざかる三重子の後ろ姿を見つめていたが、私はあわてて三重子のあとを追った。山口さん、と呼びかけると、あれユミちゃんよ！と三重子はふりかえらず叫び返した。さつき歩いたのと似たような路地を、三重子は走っていく。三重子の先に走る男の姿がある。兄か。あれが兄か。こんなところで三重子は兄を見つけたのか。でも、兄はあんなに背が低かったっけ。(2)丸ぼちやな体つきだったっけ。三重子の見間違いじゃないのか。いや、会わないあいだに兄が変わったのかもしれない。三重子から数十メートル遅れて私も走る。腹のなかでビールが(3)揺れる。ユミちゃん、待ってユミちゃん。三重子は叫びながら夕暮れの町を走り続ける。三重子も、三重子の先を走る男も、私からどんどん離れていく。(4)もうどうでもいいやと、息が切れてきて諦めるように私は思ったが、それでも意志と反対に私の足は走り続ける。男と三重子のあとを追い、路地を抜け、大通りに出、ガードレールで区切られた歩道を走り続ける。

横つ腹痛い、と思ったとき、私の頭になぜか、福袋が思い浮かんだ。母が毎年正月になると買っていた、実家のそばのスーパーマーケットで売り出す赤地に福と白く抜かれた福袋。母はわくわくとその袋を開けるのだが、その中身はいつも母を失望させた。化繊のセーター、ウールだが黄色や紫といったへんな色合いのスカート、フリルのついたブラウス、安っぽいジャケット、ど派手スカーフ、あきらかに売れ残りといった品々に、「あーあ、だまされた」と母は肩を落とす。もう買うのやめなさいよ、とその都度父に言われるのだが、母は案外けろりとして、化繊セーターやフリルブラウスを着るようになる。「案外いい買い物だったわよ」と、自慢げに言ったりもする。そうして次の年が明ければ、またいそいそと母は福袋を買いに行く。

ひよつとしたら私たちは、と、兄かもしれない男と、彼を追う兄の恋人のあとをばたばたと走りながら、私は唐突に思いつく。ひよつとしたら私たちはだれも、福袋を持たされてこの世に出てくるのではないか。福袋には、生まれ落ちて以降味わうことになるすべてが入っている。希望も絶望も、よろこびも苦悩も、笑い声もおさえた泣き声も、愛する気持ちも憎む気持ちもぜんぶ入っている。福と袋に書いてあるからすべてが福とはかぎらない。袋の中身はときに、期待していたものとぜんぜん違う。安っぽく、つまらなく見える。ほかの袋を選べばよかったと思ったりもする。それなのに私たちは袋の中身を捨てることができない。いじいじと身につけて、なんとか折り合いをつけて、それらが肌なじむころには、どのようにしてそれを手にしたのだから忘れてしまっている。安っぽいものもつまらないものも、それはただそこにある。自分だけに持たされたものとしてそこにあ

る。私は何を産み何を育てたのかと母は言った。でも最後の最後に、母はわかったはずである。母が産み、育てることによって兄が出現したのではない。兄は最初から母の袋の中のひとつだった。私にとってそうであるように。

息が (b) れる。足が痛む。横っ腹がじくじく痛む。脂くさいげっぷが出る。遠く、人差し指くらいの大きさになってしまった三重子が、男に追いつき、飛びかかるようにしてその背中をつかむのが見える。三重子につかまった男が兄なのか、人違いなのか、ここからではわからない。髪を振り乱して三重子はだれを、いや何をつかまえたんだろう？ それもまた、三重子の袋の中身なのか。私は走るのをやめ、そちらに向かつて歩く。乱れた呼吸が鼓膜の内側で響く。

(角田 光代「福袋」)

問一 傍線部 (A) と (E) のカタカナの部分に漢字に直せ。

問二 (①) と (④) に入る語句として最も適当なものを次のア～エの中から一つずつ選び記号でこたえよ。ただし、一つの記号は一度しか選べないものとする。

ア・あんなに イ・とつさに ウ・たぼたぼと エ・なんか

問三 本文中の (a) (b) に入る漢字を一字で答えよ。

問四、傍線部 (F) 「私を苛立たせる」とあるが、どうして私をいらつかせたのか。本文のことばを用いて三〇字以内で答えよ。

問五、私は福袋をどのようなものと考えているのか。本文のことばを用いて三〇字以内で答えよ。